

「^{じげ}地下のもん」のための地域づくりとは

—島根県・鳥取県の中山間地域での事例調査より—

信原 優子

キーワード：中山間地域、地域コミュニティ、地域づくり、地域資源

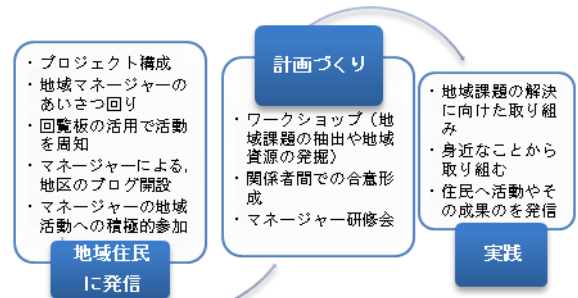
1. 研究の背景と目的

日本の中山間地域は、戦後における大量の人口流出が発端となり過疎化・高齢化が著しく進行し、それに伴い集落機能の低下、担い手不足等の問題が顕在化してきた。これらの課題を解決するため、国や地方で対策が講じられてきたが、その多くは定住化を前提とした地域活性化を目的としており、必ずしも地元住民の問題認識と合致しているとは言えない。そこで本研究は、各種活動への参加や関係者への聞き取り・会話等の実地経験に基づき、住民（地下のもん）のための地域づくりを考察し、現行の地域づくりを再検証することを目的とする。

2. 地域づくりに関する事例調査

(1) 地域運営の問題解決に向けた取り組み（島根県中山間地域コミュニティ再生重点プロジェクト）

本プロジェクトでは、『多様な主体の参画による、集落を超えた新たな集落運営の仕組みづくり』を目標に、各地区で選定された地域マネージャー*1)と役員が中心となってプロジェクトが創設され、多様な地域活動が展開されている(図-1)。対象地区となる9地区のうち4地区の取り組みの参与観察を行ったが、住民主体と銘打っているにも関わらず、実際のプロジェクトの進行は地域マネージャーに大きく依存していることがわかった。また、Iターン者や若年のマネージャーは住民からの協力が得られにくい傾向が見られた。この事例より、地域づくりには地域に根ざした既存の組織や人のつながりを活用することが妥当であることが判明した。



(2) 地域資源の活用を通じた地域づくり（島根県飯南町野萱地区での鉄穴流し（かんながし）*2) 企画）

本企画は、地元の自治区振興会によって提案され、同地区に点在する古来の製鉄産業に由来した遺跡を貴重な歴史資源として地元の人に周知させ、地域に対する誇りや関心を促すことが狙いとなっている。地区内で開催した講演会やウォーキングを通じ、「地元の希望は定住化や活性化ではなく、縮小していく地域の実情を知りつつもその土地で生まれ育ったことに自信をもてるような地域づくりをすること」という住民の意思が聞かれた。

(3) 鳥取県大山町での地域問題に対する住民の認識を調査（農業関係者への聞き取り調査より）

大山町は鳥取県西部に位置し、人口減少・高齢化が著しく、地域の担い手不足が問題は深刻である。本調査では、耕作放棄地問題を切り口として、地元住民の地域の問題に対する認識を調査した。耕作放棄地の多くは戦後の国営事業や生産物価格の低迷など時勢の影響もあるため、住民の多くは対策へ批判的であり閉塞感を感じている。その様な中、「自分たちの手で地域を良くし次世代に継承していきたい」と、意欲的に放棄地解消に臨む一人の農業者もおり、その取り組みは自主的なもので、昔ながらの相互扶助の精神が根付いたものであった。

3. まとめ

本研究の事例調査から、地域づくりとは地元の人びとの営みによって形成される有機的なものであるべきだと考察した。しかし、実際の行政主導の地域づくりの場では、住民にとって義務感に苛まれ好ましくないものとなっている場合も多い。地元の人が自分の地域で生きることに自信をもち、楽しく働くことを支援する地域づくりの方向へと見直す必要がある。一方、住民には、自ら相互扶助の精神を養い自主性を獲得する努力が求められる。

1) 地域マネージャー…主体間の結節的役割をもち、プロジェクトを円滑に進める役割を担う人で、県により採用され、各地区に配置される。
2) 鉄穴流し…古来の製鉄産業において、主に中国地方でおこなわれていた独特な採鉄法。比重を利用して砂鉄を収集する。